

## 書 評

新谷尚紀著

## 『民俗学とは何か—柳田・折口・渋沢に学び直す』

(吉川弘文館 2011 年)

郭 育 仁

近年、文化政策研究は盛んである。その多様性について、井口(2008)より「10人の文化政策学者がいれば、10の文化政策学がある」と示唆されている。一方、問題解決の学問として期待される政策科学にとってみれば、地域社会の問題解決のための文化研究こそが、地方自治レベルの文化政策に求められる文化政策研究の視座として有意義なものとして評者は考えている。

本書は、民俗学を、特に「日本民俗学」を柳田國男、折口信夫、渋沢敬三という日本民俗学の先駆者たちの思想や方法論を学史的に再確認したものであり、柳田の創生した日本民俗学は、「現代の社会の問題を出発点として、それらのよって来た原因を歴史をさかのぼる中に見出そうとした視点と方法でした」(p.83)と纏めている。それにより、日本民俗学の新たな可能性が見出され、また、欧米で良く見られるような、伝説、童話、俚諺、迷信を研究する「民俗学」、「フォークロア」を異とする「日本民俗学」が日本人の自前の学問であることを誇ることができよう。

全体の章立ては、第一章民俗学への誤解、第二章柳田國男以前の民俗学、第三章柳田國男の日本民俗学—それは民間伝承論、第四章戦後日本民俗学の出発、第五章日本民俗学の新たな出発である。巻末のあとがきによれば、「本書の記述ではこれまで書かれたり語られたりしてきた日本民俗学の歴史とは異なる部分も少なくありません。新しい事実を示すことができた」とす

ればありがたい」ということである。

言い換えれば、現によく聞かれるのは「民俗」と「民族」とがどう違うのか。そして、柳田國男以前、少なくとも近世から明治までこの国の民俗や風俗に着目した庶民の歴史研究はなかったのか。さまざまな問いに対して、第1章と第2章において整理されている。最も、著者が伝えようとするのは、日本民俗学と欧米のそれが自国の生活文化の歴史を研究する点に於いて類似するが、日本民俗学とは「民俗を歴史資料として読み解く生活文化の変遷論であり伝承論でした」(p.5~6)。そのなかで重要視されるのは目の前にある事実を伝承の視点で捉え直し、それぞれの時代で生き延びた文化的事象の意味を読み解くことにある。つまり、それぞれの文化事象から伝わる民俗のメッセージは問題解決の糸口を与えてくれるということである。また、変遷論に見出される過去と現在の比較によって、生活の変わり目を浮き彫りにすることができる。そのなか、「諦められぬ過去」と「見究められぬ未来」を繋ぐ現在は何のような状況に於かれるのを知り、今の生活で言える本当の豊かさとは何か、それを見直す手がかりが用意されている。従って、戦後、柳田の提唱した「現代科学」としての民俗学は現代社会の問題解決に役に立つための文化歴史科学<sup>1</sup>と位置づけられる。

第3章では、柳田の構想した日本民俗学、それに対する折口信夫と渋沢敬三の視点も視野に入れて日本民俗学の着目点とその意義について

<sup>1</sup> 文化歴史科学という言葉は、柳田の女婿である堀一郎より柳田民俗学を理解し提唱した概念である。本書、163ページより著者の解釈を引用すると、「民俗学は広義の歴史学である同時に、単なる歴史学にとどまらず、文化の伝承性に注目するもう1つの哲学的な意味を持つ歴史学である」となる。

検討をなされてきた。しかし、民俗学を語るには、なぜ渋沢敬三を取り上げたのか。寡聞にしても、私にとって本書を紐解くに至るまでの誘因の一つであった。大概の想像としては、柳田・折口と同じ時代に生きた経済人—渋沢が、民俗学の研究助成に大いに貢献したくらいの話だろうと思われがちであった。戦前戦後に渡り、日本の経済界に活躍した渋沢は、民俗学に留まらず、民族学（文化人類学も含む）などの諸学問に財政的支援をしたのは周知の通りである<sup>2</sup>。一方、彼の仕事後の余興<sup>3</sup>として、庶民の生活用具や生産用具を集め、後にアチック・ミュージアムの設立へとその思いから学ぶものがある。それが、柳田の研究の中で重視された無形の生活意識に対して、有形的な民俗品（民具）にも生活意識が潜んでいるという考えである。民具の収集はやや無形に偏った民俗研究に手がかりを供することにあると言っても良いだろう。この点だけでも、今日、市町村レベルの文化行政の現場に於いて歴史民俗資料館と称する民具を集めている文化施設に大きな示唆を与えてくれる気がする。

では、柳田の注目した生活意識とは何か。著者の解説に従っていうならば、柳田が、南方熊楠から一郷土研究に『巫女考』などの風俗研究が相応しくない—との批判を受け、自らの目指す学問とは「ルーラル・エコノミー」であると主張した。ここで注意を払いたいのは、「エコノミー」についての解釈である。『「エコノミー」は直訳すれば経済ですが、むしろ生活上の資源の節約の知恵や技能など広い意味を持つ意味で用いていることです』（p.57）と著者が示してくれた柳田の考えである。また、『巫女考』とは最狭義の経済問題に触れているとも柳田が考

えている<sup>4</sup>。

続いて、第四章から第五章にかけては、戦後以降の日本民俗学の再出発とその発展を纏めたものである。当時、既に晩年に至りつつあった柳田にとって、しかし、その後継者をしっかりと育てずとも、戦前から柳田に出会いその学問の真髓に最大の理解者である折口信夫をはじめ、その弟子たちとともに戦後の民俗学の発展に大いに尽力した。具体的には、大学アカデミズムの世界への進出、文化財行政への寄与、さらに国立民族学博物館と国立歴史民俗博物館の創設に関わるまで、柳田の「野の学問」からスタートした日本民俗学は多様な後継者たちの手によってその実りを見せ、役割を果たしている。一方で、著者にも指摘されたように、柳田の比較研究法を受け継ぎながら、高度経済成長を経験した日本人の生活とそれを取り巻く環境がどう変わったのかは、まだ課題として残っている。民俗学では、高度経済成長によって引き起こされた「生活現場の構造的変化を継続的に追跡し・・・中略・・・単なる衣食住などの生活変遷史を追うというだけでなく、それをもたらず政治や経済、ポリティクスやエコノミーの力学をも射程に入れるという民俗学の視点が用意されています」（p.213, 下線、評者）という指摘が有する意味を考えてみたい。

そこにこれからの文化政策に求められている視座が存在し、文化政策の守備範囲としていくべき必要があると評者が思う。国レベルの文化政策の疲弊と思惑を見事に指摘している岩本通弥の仕事<sup>5</sup>に一目を置くべきである。また、地方レベルの文化政策や文化行政においては、「柳田や折口の時代には存在しなかった生活用具や生活環境のあり方を前にして、技術と意識

<sup>2</sup> 本書によると、渋沢が財力的に支援した学者に石田英一郎（文化人類学者）、岡正雄（民族学者）、宮本常一（民俗学者）などが挙げられている。その中で、当時、まだ若き研究者である宮本常一に戦前と戦後の諸相を繋ぐためのパイプ役として期待されていたという。

<sup>3</sup> 渋沢は自身が余興と思っていない。本書 102～103 ページで紹介されたように、本業の余暇を活用しながら、民俗品（民具）の収集を行っていたが、本業より遙かにやり甲斐があると考えていたのがアチック・ミュージアムの活動ではなかっただろう。

<sup>4</sup> 『巫女考』の一節を引用すれば、「以前の小さい社会においては目にこそ見えないが、村の神様ほど親密なる保護者はほかにはなかったのである。ゆえに毎年の風雨寒温及びこれに伴う収穫の多少、あるいは流行病の早く鎮まるか烈しいかのごとき、およそ百姓が独力で判断しかねる大小の問題については、いつもその助言を求めたものである。他にこれといって智術のなかった田舎では、農作の豊凶のごときは人力以上の大事件で、当業者の未来に惑うたことも我々の想像の外である」（『定本柳田國男全集 11』、1990 年、324～325 ページ）。すなわち、迷信というよりも、一年の収穫に関わる問題は、生計に対する「不安」である。今や、科学進歩の時代といっても、生計（生活）への不安というものは形が変わっても存在するのだろうか。

<sup>5</sup> 国レベルの文化政策の動向についての岩本通弥の代表的な論考は、「現代日本の文化政策とその政治資源化」（山下晋司、2007）を挙げることができる。詳細は改めて別稿で検討するが、1975 年の文化財保護法の改訂を機に民俗文化はナショナル・アイデンティティ再構築のための資源として、様々な政策や事業に取り入れるようになったと指摘した。新潟県佐渡における佐渡奉行所の復元は、戦後日本の社会変動がもたらした現実を無視し、幻想に陥った文化政策のトラウマであり、トップダウンの意味合いが強いと思われる。「外から強要される誇りと愛着」という彼の言葉はその端的を示している。

の伝承と対応とが、個々の現場的にまた列島規模的にどのようになされているのか、へと注目する視点」(p.218)は、地方レベルの文化政策や文化行政に対して示唆に富んだものである。たとえば、筆者(2010)がかつての修士論文で論じた「ローカルな思想」とは、祭りによる観光振興の現場において住まう人が大事にして、守りたいのは決して花火大会ではなく、「家族の団らんや近隣との親睦関係」と「平穏なる暮らしへの祈り」というものに違いない。

最後の一つ、本書を勧める理由は、民俗学というタイトルに興味が無くても、本書のなかで随所に拾えば読み取れる一学問世界のもう一つの側面―師弟関係は大学院生にとっての鑑であると強く思われる。端的に例を挙げるならば、戦後、渋沢の提唱のもとで人文科学の学際的協業が活発化になり、柳田を中心とした「民間伝承の会」は「日本民俗学会」へとその名称を変更せざるを得なかった<sup>6</sup>。その際、中心役の一人である折口信夫は、柳田先生の創生した民俗学が「象牙の塔」のような大学専門研究者の学問に留まらず、国民一般の人々のための学問でもあるという柳田の思いと懸念を「一番よく分かっております。誰よりも一番分かっております」と、自分にとって大切な先生に向かって最大の理解と敬意を示している。このような折口の、学問に対する誠実さと謙虚さに感動したのは私だけだろうか。

さて、文化政策の注目する「文化」はどこが問題なのか、興味は尽きないが、それについての論考は、次の機会に委ねたい。

## 参考文献

- (1)井口貢編著『入門 文化政策』ミネルヴァ書房、2008年、1ページ
- (2)郭育仁『観光化されたまつりに求められる文化政策の視座―木之本地蔵大縁日を中心として―』同志社大学大学院総合政策科学研究科博士前期課程修了論文、2010年
- (3)柳田國男『巫女考』(初出「郷土研究」大正二年三月―大正三年二月)『定本柳田國男全集11』筑摩書房、1990年
- (4)山下晋司編著『資源化する文化』弘文堂、2007年

<sup>6</sup> 文部省の科学研究助成を受けるためであった。